

テーマ展「土器文様の不思議—石狩市内の遺跡から—」 および関連講座について

Exhibition report; “Design of pottery;
excavated from the archaeological sites in Ishikari City”

荒山 千恵*

Chie ARAYAMA*

キーワード：上花畔1遺跡，志美4遺跡，紅葉山33号遺跡，若生C遺跡

1. はじめに

本稿では，2017年9月20日～11月30日（11月6日迄の予定を延長開催）に，いしかり砂丘の風資料館で開催された，テーマ展「土器文様の不思議—石狩市内の遺跡から—」の内容をもとに展示した土器について紹介する。

2. 目的

本テーマ展の目的は，石狩市内の遺跡で出土し

た縄文文化・続縄文文化・擦文文化の土器について，各期の特徴や変遷を紹介することにある（いしかり砂丘の風資料館，2017）。現在，いしかり砂丘の風資料館の常設展に展示されている土器は，石狩紅葉山49号遺跡（以下，49号遺跡）から出土した縄文土器のみである。今回は，これまでに市内の遺跡で出土した数多くの土器のうち，49号遺跡以外の4遺跡（図1）から出土した21点（付表1，付図1）を展示し，各期の土器文様を中心に紹介した。以下に，展示した土器にもとづいて内容を紹介する。

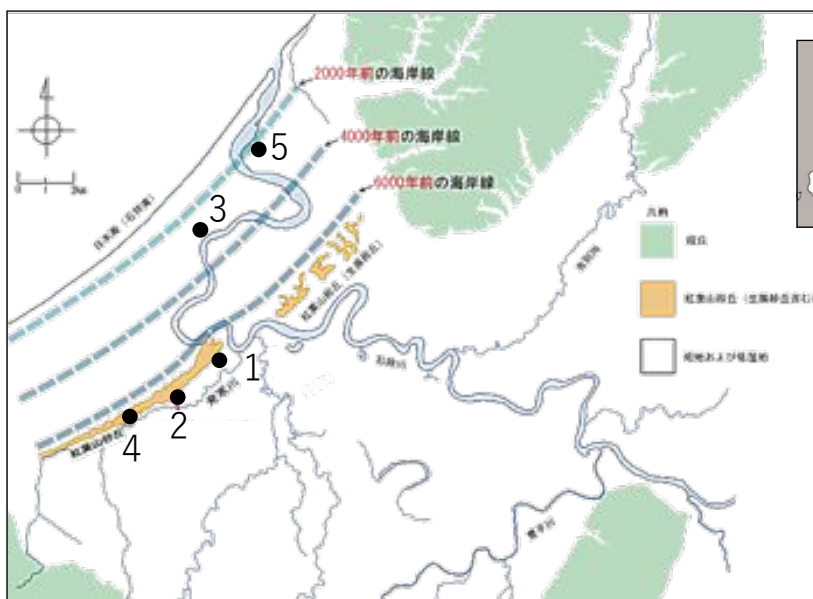


図1. 遺跡の位置図（いしかり砂丘の風資料館常設展示図より位置を加筆改変）。

1. 上花畔1遺跡（石狩市緑苑台東）
2. 石狩紅葉山49号遺跡（石狩市花川）
3. 志美4遺跡（石狩市新港東）
4. 紅葉山33号遺跡（石狩市花川南）
5. 若生C遺跡（石狩市若生）

* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

3. 展示した各期の土器

(1) 縄文文化前半期

石狩市内の花川・花畔地区の平野部に人々の活動が認められるようになるのは、今から5500年前～5000年前頃と考えられる。縄文海進のピークを迎えた約6000年前の後、海岸線の後退とともに現在の平野部の陸地化が進む^(注1)。

現在の海岸から5～6km内陸に位置する紅葉山砂丘は、手稲山麓から花川地区を経て石狩丘陵へと南西-北東方向に延びる地形で、紅葉山砂丘上と内陸側低地に複数の遺跡が確認されてきた。その一つである紅葉山砂丘の内陸側に位置する上花畔1遺跡(図1-1)(石狩市花川東)では、縄文文化前期後半から中期の土器が出土した(石狩市教育委員会, 1992)。

付図1-1は、上花畔1遺跡出土の深鉢(縄文文化中期)である(写真1)。底部を欠損しているが全体の約1/2ほどが残存し、現存高は27cmで全体的な器形が復元されている。外面の口唇部直下に幅約2cmの肥厚帯をもち、文様は外面全体に結束羽状縄文が施されている。文様の他には複数の補修孔が穿たれている。特筆すべき点は、補修孔の一部に紐状のものが残されていることであり、稀少である。

なお、縄文文化前半期を代表する市内の遺跡の一つに、いしかり砂丘の風資料館の常設展に紹介している石狩紅葉山49号遺跡がある(図1-2)(石狩市教育委員会, 2005)。紅葉山砂丘の内陸側斜面では、縄文文化中期の竪穴住居趾2基が発見された。また、低湿地部で確認された河川跡では、縄文文化中期の河川漁の仕掛けをはじめ稀少な木製品が数多く出土した(石狩市教育委員会, 2003; いしかり砂丘の風資料館, 2005; 石橋, 2007; 荒山・石橋, 2013; 荒山, 2015; 2016)。

(2) 縄文文化後半期

石狩市内で縄文文化後半期を代表する遺跡に、志美遺跡群(石狩市新港東)があり(志美1・志美

2・志美3・志美4遺跡)、縄文文化晩期の竪穴住居址や土壇墓が出土した(石狩市教育委員会, 1977; 1979)。これらの遺跡は現海岸線から約2km内陸にあり、花畔砂堤列^(注2)上に位置する。展示したのは、志美4遺跡(図1-3)から出土した、壺・高坏・注口土器の3点で、いずれも異なる土壇墓から出土した。(付図1-2～4, 写真2-1～3)。

付図1-2は完形の壺である。報告書の所見に、「この土器は使用によると思われる磨耗や汚れが見られず、副葬用に新たに作られたと思われる」とある(石狩市教育委員会, 1979)。この遺跡から出土した土器の器種をみると、壺は鉢・台付鉢とともに多くみられる。付図1-3は高坏で、全体に赤色顔料がみられる。この遺跡で出土した高坏の復元資料は2個体で、この他に破片で2個体分が確認されている。付図1-4は注口土器で、この遺跡では本例と破片1点のみで確認されている器種である。これら3点の土器は大洞式系土器で、文様はいずれも繊細な縄文を地文に、雲形文ないしは雲形文をくずしたような文様が器の上半部に施されている^(注3)。

(3) 続縄文文化前半期

紅葉山33号遺跡(図1-4)(石狩市花川南)は紅葉山砂丘上に位置する。続縄文文化前半期の土壇墓が30基以上発見され、副葬品として土器・石器・玉類等が出土した(石狩市教育委員会, 1984; 石橋, 2012)。展示したのは、土壇墓から出土した、甕2点、壺形土器1点、小型の鉢形土器2点、小型の異形土器1点である(付図1-5～10, 写真3)。いずれも異なる土壇墓から出土した。写真3は、このうち甕2点、壺形土器1点を示したものである。これら土器のうち、甕2点(付図1-5・6)には、上半部に縄文を地文として数条一組の沈線が並行に横走し、下半部に縞縄文が施されており、恵山文化期に特徴的なものと考えられる^(注4)。



写真1



1



2



3

写真2



1



2



3

写真3



1



2

写真4



1



2

左の土器の底部を上にして撮影。

写真5



2



1

写真6

※掲載している写真の土器は縮尺不同（撮影：筆者）

（４）続縄文文化後半期

石狩川河口右岸に位置する若生C遺跡（図1-5）（石狩市若生）では、続縄文文化後半期のうち、後北式土器が出土する墓地と、後続する北大式土器が出土する墓地が確認されている（注5）（石狩町教育委員会, 1975；1976；1977）。

合葬墓（第20号墓）から出土した土器9点は、1982年に石狩市の市指定文化財（第3号）に指定されている。これらは後北式土器の一群で、今回展示したのは、浅鉢形土器7点、注口土器1点である（付図1-11～18、写真4）。写真4は、浅鉢形土器のうちの1点、注口土器1点を示したものである。浅鉢形土器（付図1-11）には列点文や帯状縄文が施され、さらに赤色の彩色により文様が施されている。注口土器（付図1-16）には、微隆起線文・列点文・帯状縄文が施され、口縁部には口唇部の波状の形状に合わせた弧状の文様帯、胴部には半円形を呈する文様帯がみられ、その下部には帯状縄文が横走する。さらに、外面には赤色顔料が付着する。土器の底面にも帯状縄文による文様が認められる。

続縄文文化末葉に属する土器で展示したのは北大式土器1点である（付図1-19、写真5-1）。口縁部には円形刺突文が一周し、その下には2条1組の沈線文によるV字状の文様がつけられ、さらに上半部には縄文・爪形文・2条1組の横走沈線文・2条1組の沈線文により施された菱形に円形刺突文を組合わせた文様が施される。文様以外の特徴としては、底部の中央が焼成後に意図的に打ち抜かれている点が挙げられる（写真5-2）。このような特徴は、若生C遺跡から出土した他の北大式期の土器の底部にも多く確認されている（石狩町教育委員会, 1975）。

（５）擦文文化

紅葉山砂丘もしくは花畔砂堤列に位置し、発掘調査によって擦文文化の遺構・遺物が確認されている遺跡には、石狩紅葉山49号遺跡（石狩市教育委員会, 2005）、紅葉山25遺跡（石狩町教育委員会, 1975a）若生C遺跡（石狩町教育委員会,

1975b）がある。石狩紅葉山49号遺跡では砂丘上から擦文文化の竪穴住居址2基、擦文文化初頭の土器が出土した。紅葉山25遺跡でも、竪穴住居址4基、擦文文化初頭の土器が出土した。今回は展示スペースの関係から、若生C遺跡の擦文土器を展示した。若生C遺跡は、続縄文文化後半期に加え、擦文文化の竪穴住居址6基が発見されている。若生C遺跡は発掘調査が行われた当時（1974～1976年）には、八幡町遺跡ワッカオイ地点A・C・D地区と呼ばれていた。先に紹介した後北式土器9点が出土した墓が確認されたのはD地区、北大式期の墓や擦文文化の竪穴住居址が発見されたのはC地区である。また、この遺跡の試掘調査でも擦文土器（小型の甕、坏）が出土した。展示したのは、試掘調査で出土した小型の甕1点、住居址から出土した甕1点である（付図1-20・21、写真6）。どちらも口縁部には綾杉文、上半部には擦文土器に特徴的な刻線文が施されている。器形を比較すると、小型の甕は口縁部が外に開き、もう一方は上方に立ち上がる。文様の特徴と器形の特徴から、擦文文化中期から後期に属するものと考えられる（注6）。

4. おわりに

テーマ展「土器文様の不思議」では、石狩市内で出土した各期の土器の特徴的な文様を中心に紹介し、縄文文化から擦文文化までを取り上げた。今後も、地域の歴史について、これまでの遺跡の調査成果と新たな検討を重ねながら、展示や講座をとおして紹介していきたい。

附記：テーマ展の様子は写真7のおとりである。また、テーマ展の関連企画として、体験講座「縄文土器の文様を作ろう」を開催した（開催日：2017年10月28日（土）、場所：いしかり砂丘の風資料館）。縄文土器の文様を観察し、「①結束羽状縄文」と「②半截竹管文」を粘土に再現した文様の模型を作成した（注7）（写真8・9）。①では、紐を撚って原体を作るところから挑戦し、撚りの方向が反対の2本を組み合わせる粘土に施文することで羽状縄文が現れることを体験した。②で



写真7. テーマ展「土器文様の不思議-石狩市内の遺跡から-」の様子。



写真8. 結束羽状縄文を再現した模型作り。

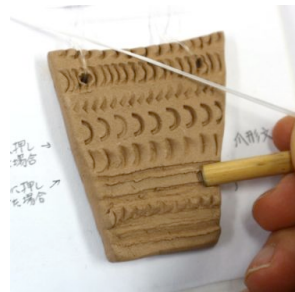


写真9. 半截竹管文を再現した模型作り。

は、同じ工具でも、押し当てる角度の変化、突く・押す・引くなどの違いによって様々な文様が現れることを実際に粘土に再現した。

注1 松下勝秀は花畔低地の形成過程について、「海浜線の前進速度は $\approx 1\text{km}/1,000\text{y}$ 」（松下, 1979）を示している。この算出方法にもとづくと、約4000年前（縄文文化中期後半頃）の紅葉山砂丘と海岸との距離は砂丘から約2km（石狩市教育委員会, 2005）の推定値となる。これまでに紅葉山砂丘周辺で発掘調査された遺跡では、上花畔1遺跡に縄文文化前期後半の土器が出土し、紅葉山52号遺跡では木製の魚捕獲用施設の部品が縄文文化前期末頃と推定され（石狩町教育委員会, 1992；石狩市教育委員会, 2009）、縄文文化前期後半頃からこの辺りで人々が活動していたものと考えられる。

注2 花畔砂堤列は、石狩湾の海岸線に平行な波状地形で、志美遺跡群はその砂堤列上に位置する（石狩町教育委員会, 1977）。なお、当該地域の陸化および遺跡に関しては、上記文献の他に、上杉・遠藤（1973）、上野（1978）を参照した。

注3 関連して、宇田川, 1988；大川・鈴木・工業編, 1996；

熊谷, 2001；小林・小川, 1989；藤沼, 1994を参照した。

注4 関連して、木村, 1975；高橋, 2003を参照した。

注5 関連して、大沼編, 2004；加藤・沢編, 1982；榊田, 2016；鈴木, 1999を参照した。

注6 関連して、宇田川, 1988；大沼編, 2004；榊田, 2016；塚本, 2002；中田ほか, 1999を参照した。

注7 関連して、山内, 1979；戸田, 1994；西川, 1994；田中・佐原, 2002を参照した。

引用文献

荒山千恵, 2015. 縄文時代中期における河川漁の捕獲用施設について-石狩紅葉山49号遺跡を例にして-。いしかり砂丘の風資料館紀要, 5:13-21.

荒山千恵, 2016. 石狩市の市指定文化財「石狩紅葉山49号遺跡出土の木製品」。いしかり砂丘の風資料館紀要, 6:77-86.

荒山千恵・石橋孝夫, 2013. 定置式河川漁撈施設の構造材。考古学ジャーナル, 643:11-15.

藤沼邦彦, 1994. 文様の描き方-亀ヶ岡式土器の雲形文の場合-。縄文文化の研究5, 雄山閣, 151-167.

石橋孝夫, 2007. 定置式河川漁撈-石狩紅葉山49号遺跡の定置式漁撈-。縄文時代の考古学5なりわい-食料生産の技術-, 103-112.

石橋孝夫, 2012. 特集 続縄文文化とは③ 道央部の続縄文文化の特徴。Arctic Circle, 85:4-9.

石狩町教育委員会, 1975a. 紅葉山砂丘における考古学的調査報告。

石狩町教育委員会, 1975b. Wakkaoi-石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点調査報告書-。

石狩町教育委員会, 1976. Wakkaoi II-石狩, ワッカオイ地点D地区における続縄文末期の発掘調査-。

石狩町教育委員会, 1977. Wakkaoi III-石狩, ワッカオイ地点D地区における続縄文末期の発掘調査-。

石狩町教育委員会, 1977. SHIBISHIUSU I.

石狩町教育委員会, 1979. SHIBISHIUSU II 石狩湾新港地域開発区域埋蔵文化財発掘調査報告。

石狩町教育委員会, 1984. 紅葉山33号遺跡発掘調査報告書。

石狩町教育委員会, 1992. 石狩町上花畔地区宅地開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告書。

石狩市教育委員会, 2003. 北海道石狩市石狩紅葉山49号遺跡低湿地部発掘調査概要報告（CD版）。

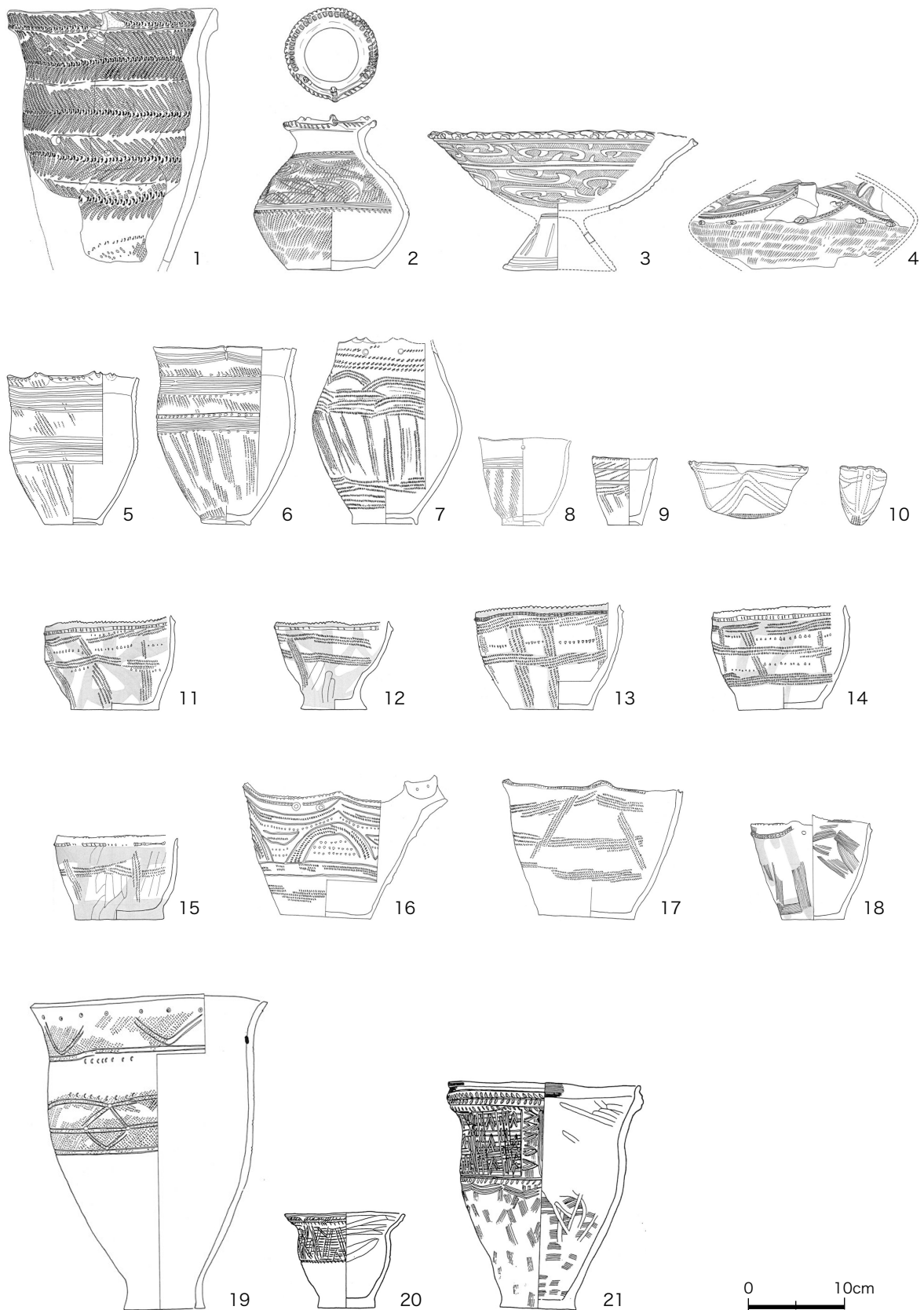
- 石狩市教育委員会, 2005. 石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書.
- 石狩市教育委員会, 2009. 石狩市紅葉山52号遺跡=札幌市K483遺跡. 石狩市教育委員会.
- いしかり砂丘の風資料館, 2005. サケの考古学-紅葉山49号遺跡と北の鮭漁の歴史. いしかり砂丘の風資料館第2回特別展図録.
- いしかり砂丘の風資料館, 2017. トピック解説「土器文様の不思議-石狩市内の遺跡から-」(テーマ展リーフレット).
- 加藤晋平・沢四郎 編, 1982. 縄文土器大成, 続縄文. 講談社.
- 木村英明, 1975. 続縄文時代の墓墳群の研究/資料篇, 石狩町教育委員会.
- 小林達雄・小川忠博, 1989. 縄文土器大観4/後期・晩期・続縄文. 小学館.
- 熊谷任志, 2001. 北海道の縄文土器. (野村崇・宇田川洋 編) 新 北海道の古代1/旧石器・縄文文化, 北海道新聞社, 138-177.
- 松下勝秀, 1979. 石狩海岸平野における埋没地形と上部更新〜完新統について. 第四紀研究, 18(2): 69-78.
- 中田裕香・上野秀一・平川善祥・越田賢一郎・石川直章・藤井誠二・石井淳, 1999. 擦文土器集成. シンポジウム 海峡と北の考古学/資料集II, 287-322.
- 西川博孝, 1994. 竹管文. 縄文文化の研究5, 雄山閣, 219-235.
- 大川清・鈴木公雄・工楽善通 編, 1996. 日本土器事典. 雄山閣.
- 大沼忠春 編, 2004. 考古資料大観11, 小学館.
- 榊田朋広, 2016. 擦文土器の研究. 北海道出版企画センター.
- 鈴木信, 1999. 北大式期以降の墓制について-北海道中央部の様相を中心として-. シンポジウム 海峡と北の考古学/資料集II, 225-286.
- 高橋正勝, 2003. 江別文化の成立と発展. (野村崇・宇田川洋 編) 新 北海道の古代2/続縄文・オホーツク文化, 北海道新聞社, 30-49.
- 田中琢・佐原真 編, 2002. 日本考古学事典. 三省堂.
- 戸田哲也, 1994. 縄文. 縄文文化の研究5, 雄山閣, 170-190.
- 塚本浩司, 2002. 擦文土器の編年と地域差について. 東京大学考古学研究室研究紀要, 17: 145-184.
- 宇田川洋, 1988. アイヌ文化成立史. 北海道出版企画センター.
- 上野秀一, 1978. 石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について-考古学資料からみた紅葉山砂丘, 花畔砂堤列の固定年代-. 北海道考古学, 14: 49-82.
- 上杉陽・遠藤邦彦, 1973. 石狩海岸平野の地形と土壌について. 第四紀研究, 12(3): 115-124.
- 山内清男, 1979. 日本先史土器の縄紋. 先史考古学会(復刻版, 1997. 示人社).

付表1. 展示した土器 (実測図) .

遺跡名	器種	器高 (cm)	最大径 (cm)	底部径 (cm)	遺構名	時期	写真	付図	出典
上花畔1	深鉢	(27)	-	欠損	-	縄文中期	1	1-1	石狩町教育委員会, 1992, 第100図
志美4	壺	15.6	15.9	9.0	第1号墓	縄文晩期	2-1	1-2	石狩町教育委員会, 1979, Fig.98-21
志美4	高杯	14.1	27.7	11.7	第8号墓	縄文晩期	2-2	1-3	石狩町教育委員会, 1979, Fig.88-1
志美4	注口土器	(8.5)	(23.4)	欠損	第14号墓	縄文晩期	2-3	1-4	石狩町教育委員会, 1979, Fig.102-27
紅葉山33	甕	18.2	14.4	5.1	GP43-1	縄縄文前半	3-3	1-5	石狩町教育委員会, 1984, 第61図1
紅葉山33	甕	15.3	13.3	5.9	GP53-1	縄縄文前半	3-2	1-6	石狩町教育委員会, 1984, 第50図1
紅葉山33	壺形土器	19.0	9.6	6.8	GP59-1	縄縄文前半	3-1	1-7	石狩町教育委員会, 1984, 第123図1
紅葉山33	小型の鉢形土器	8.9	9.4	4.4	GP01-2	縄縄文前半	-	1-8	石狩町教育委員会, 1984, 第95図2
紅葉山33	小型の鉢形土器	6.8	6.6	3.5	GP55-16	縄縄文前半	-	1-9	石狩町教育委員会, 1984, 第120図16
紅葉山33	小型の異型土器	6.0	12.1	4.9	GP60-1	縄縄文前半	-	1-10	石狩町教育委員会, 1984, 第124図1
若生C	浅鉢形土器	9.4	12.3	9.3	第20号土壇墓	縄縄文後半	4-1	1-11	実測図: 石狩町教育委員会, 1977, Fig.41-1 所見: 石狩町教育委員会, 1976: 36 (P-31)
若生C	浅鉢形土器	8.9	11.2	6.6	第20号土壇墓	縄縄文後半	-	1-12	実測図: 石狩町教育委員会, 1977, Fig.41-4 所見: 石狩町教育委員会, 1976: 36 (P-32)
若生C	浅鉢形土器	10.8	14.6	8.4	第20号土壇墓	縄縄文後半	-	1-13	実測図: 石狩町教育委員会, 1977, Fig.41-6 所見: 石狩町教育委員会, 1976: 36 (P-33)
若生C	浅鉢形土器	10.9	13.4	8.8	第20号土壇墓	縄縄文後半	-	1-14	実測図: 石狩町教育委員会, 1977, Fig.41-5 所見: 石狩町教育委員会, 1976: 37 (P-34)
若生C	浅鉢形土器	8.5	12.3	8.5	第20号土壇墓	縄縄文後半	-	1-15	実測図: 石狩町教育委員会, 1977, Fig.41-2 所見: 石狩町教育委員会, 1976: 37 (P-37)
若生C	注口土器	12.4	17.3	9.0	第20号土壇墓	縄縄文後半	4-2	1-16	実測図: 石狩町教育委員会, 1977, Fig.42-1 所見: 石狩町教育委員会, 1976: 38 (P-39)
若生C	浅鉢形土器	13.7	18.3	9.6	第20号土壇墓	縄縄文後半	-	1-17	実測図: 石狩町教育委員会, 1977, Fig.42-2 所見: 石狩町教育委員会, 1976: 38 (P-40)
若生C	浅鉢形土器	10.6	12.0	6.4	第20号土壇墓	縄縄文後半	-	1-18	実測図: 石狩町教育委員会, 1977, Fig.41-3 所見: 石狩町教育委員会, 1976: 38-39 (P-42)
若生C	甕	31.6	23.7	8.6	遺構外	縄縄文終末	5	1-19	石狩町教育委員会, 1975, 第27図4
若生C	甕	9.9	推定11.6	6.0	(分布調査出土)	擦文中~後期	6-1	1-20	石狩町教育委員会, 1975, 第19図7
若生C	甕	23.0	19.5	推定7.5	第4住居跡	擦文中~後期	6-2	1-21	石狩町教育委員会, 1975, 第19図11

() の数値は現存部の値.

遺構名は報告書による記載名.



付図1. 展示した土器（実測図）.